



菜種延
命壽

明和三年田舎
梅屋の國政



35

30

25

20



菊種延命囊四編

きくたねえんめいのぶくろ

上之巻

A461
4

御届 明治十二年十二月 日

出版人

日本橋通一丁目十九番地

大倉孫兵衛

編輯

久保田彦作

画工

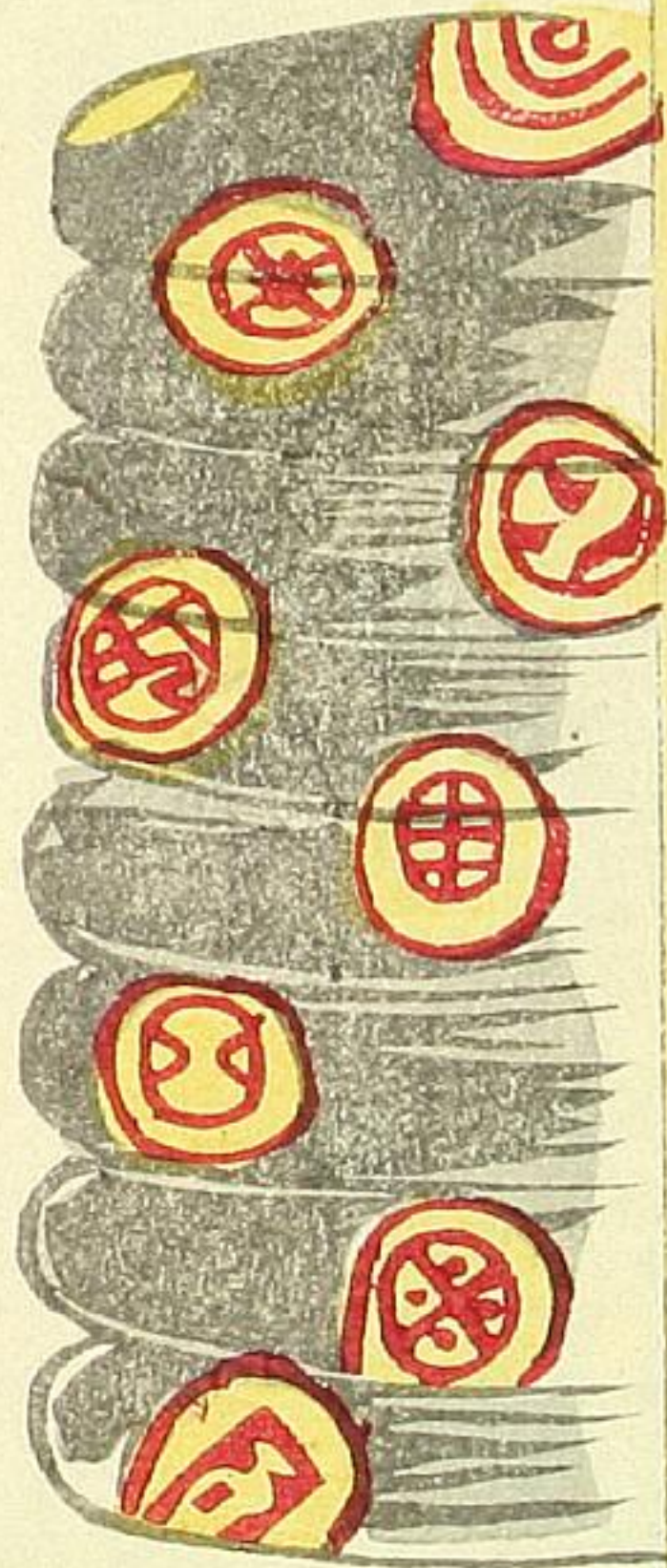
梅堂國政

48-8092

喜久重



命囊



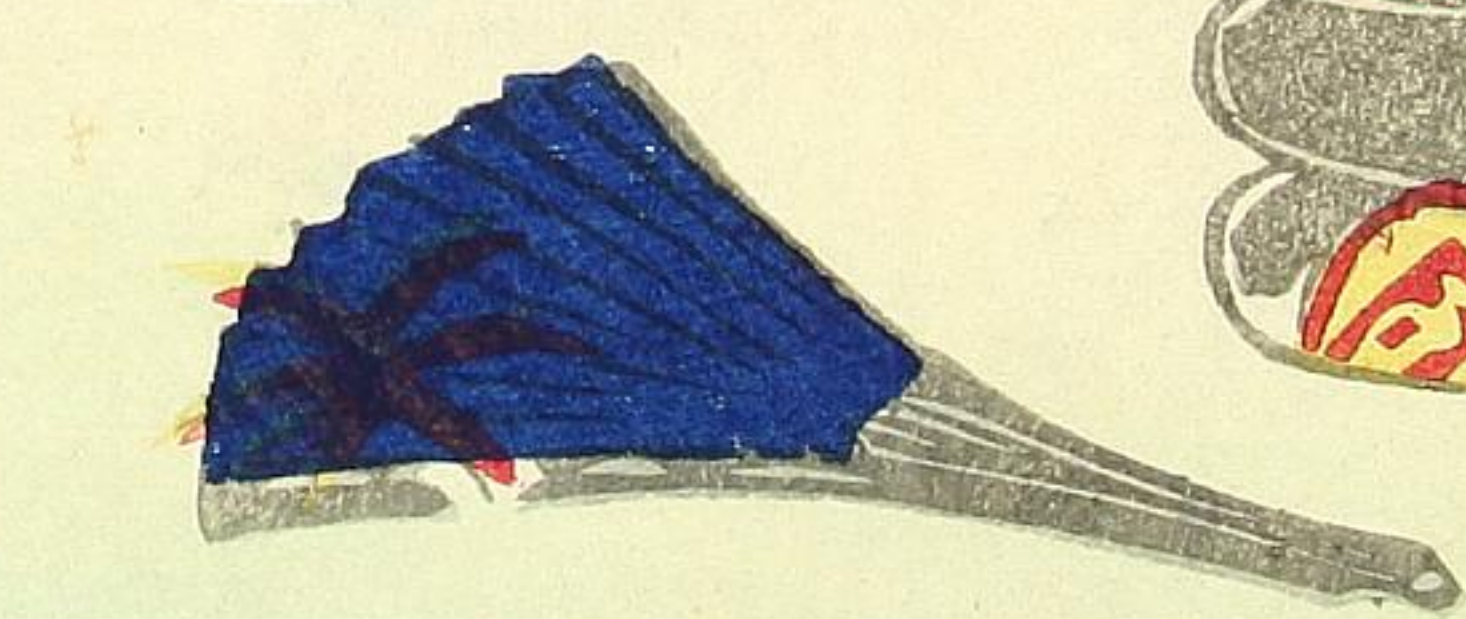
第四編

久保田彦作

綴

上

巻



梅

國政画



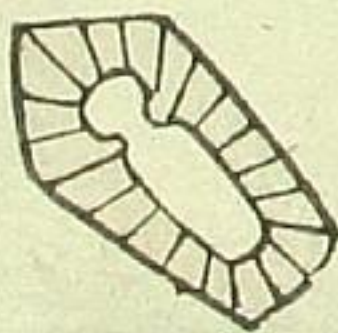
綿栄寺様

菊種延命囊第四集之序

延命といふ名に因りて。地藏の顔も先三編漸々綴りて煙草と世に亦第四編を版元の錦栄堂が頻りと催促是れ昨年鳥追於松が稀の當り味々々再び苗字の大倉入利潤哉得んとの結構なれど。河邑へ所謂僥倖決して僕が功ゆあふべと思つて聊う己惚く。扱此編の筆を執り。調度九月の發見ふ。大吉利市の斧琴と。きく城力と有の俣。智恵の囊の口を解き。雜句はく。早め序きと。雨り

明治十二年九月

久保田彦作記



愛妻於こよの方

東照大権現



脇坂淡路殿

公用人
岩田頼母



つぎに夜寝のとき

朱とまろく暗つて弄

ねがふ助ふひひつみく

密く小籠繰り及むお候と

のりふた付おと

の内へ入ておと

小袖がどぎて
けむの縞ひたト

秘密符廻年厄
併ゆる由お

い有まへと

傍りも

突い延

生小

出入の

ぬめが

備不

は程云妨は

村らおひつ

二夜付の

大のなき

波梅川と

た去来が

夜寝お和ある

対の小袖比翼

の紋とそ怪にけをそ人

入をせせつハ四小切ぬ

榜之きせて、密のこごる

小入る、ほ尻石まじり

お小令目とみひあつち

ありちり脊負出せし

まごまろるニツの小袖い

これそつらを晴死の

花小端をう

海の子を

とどくはあぬ

烟をのぎの

シテ又
ま

道好の對小袖ト云りねく

おまおまお梅川と及ま束が

えは常

目

新編四世

二

つぎ

はまの
橋を

はらへ

ての
影に

あつに
始の

夜
常の

果
一と

肝
ぶが

と
釘を

は
し一

由
内徳

事
まを

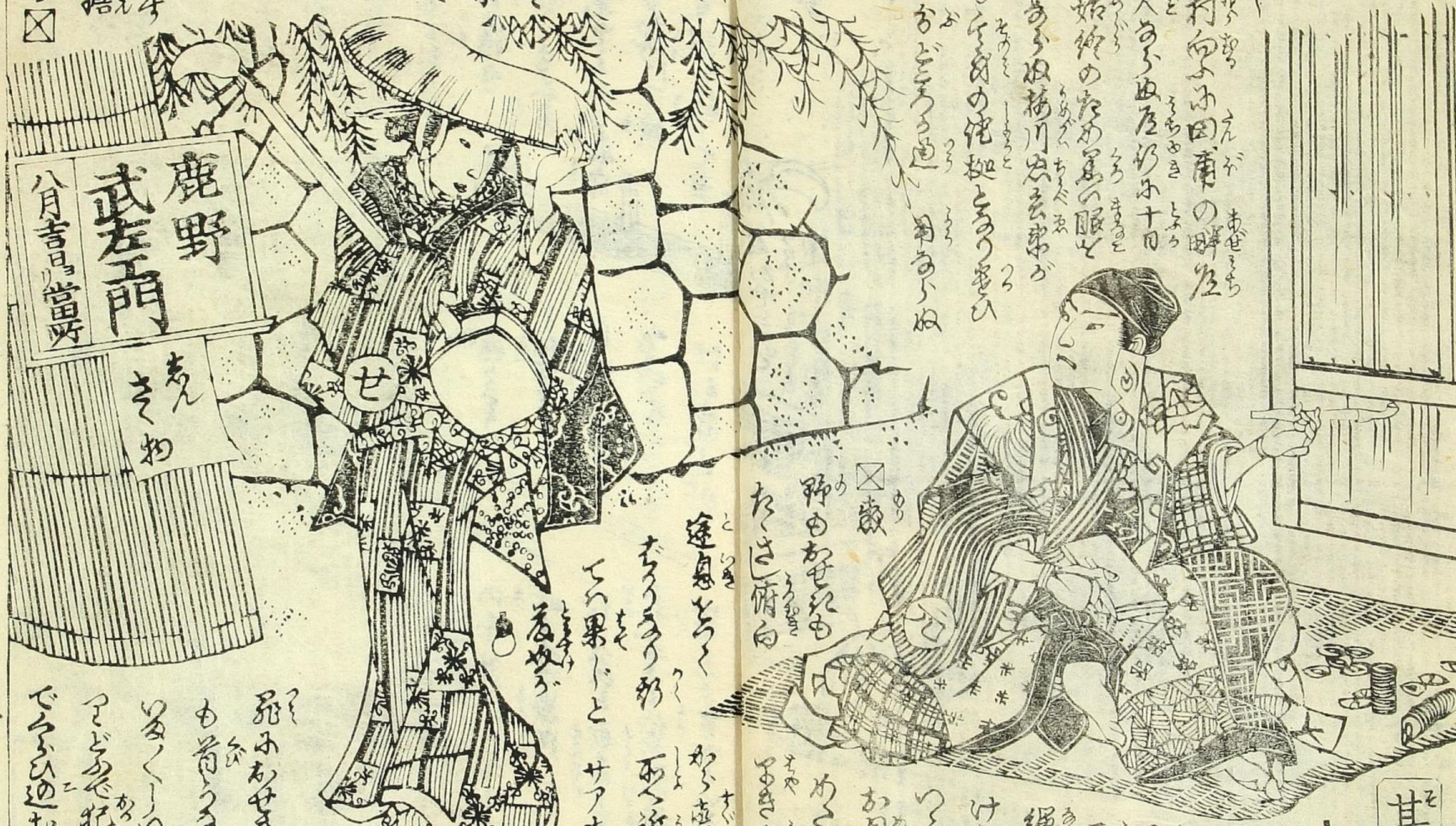
知
つる

強
病の

杉
智を

う
小大

不
救る



其二

の
子
繩

二
人
へ

け
き
く

お
月
と

め
の
科

お
水
車

か
ら
は
な
り

さ
ア
あ
お

さ
は
も

お
小
さ
な

お
首
を

お
ど
ろ

お
ま
い

お
ま
い

お
ま
い

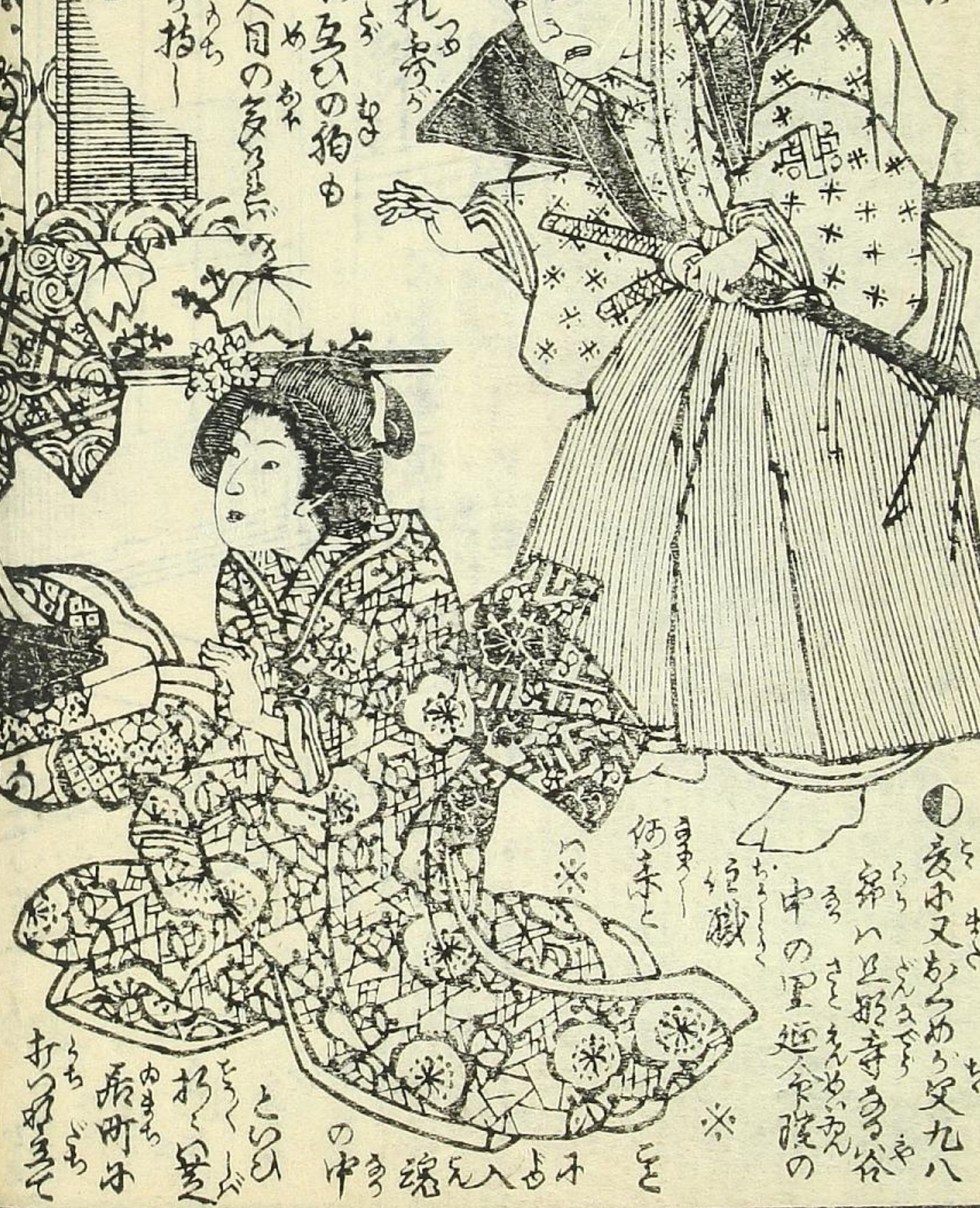
お
ま
い



新編 古今

九

つぎはちの屋敷の
 武家育
 もろの曲
 若侍の
 お侍の
 打侍の
 捲こそ
 うらさね
 色ハ被ふあらわれまき
 尾花は清きよの互の物也
 父の茶こそ人目のまき
 母の嫁ハあらあら拍
 せんす
 徳子ハ祭白せ
 徳めくれと



● 夜小又あらめり父九八
 糸ハ且形奇ある谷
 中の里延余段の
 恒歌
 何未と
 の中多 魂え入も
 とのひ
 打つ好まて

かきととまは
 是漫奉の
 男色を
 亡がすの
 きり
 あらめ
 き
 ちの
 親目
 あら
 忘れ
 て
 ま



● 中
 負ふ
 男色を
 及子
 小丸
 容
 徳

久保田彦著作
梅堂國政畫

女人禁制



大倉孫兵衛梓

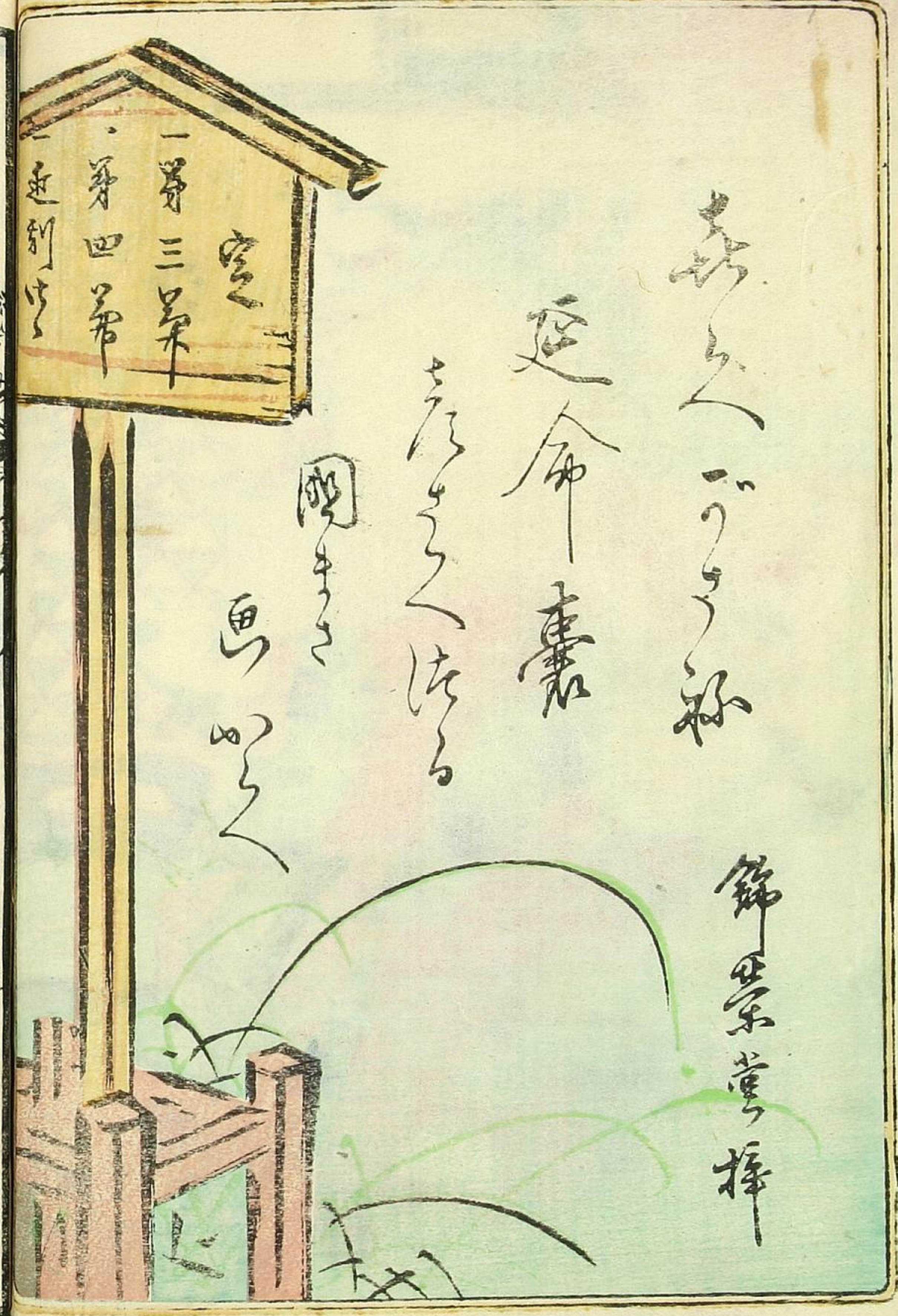
下之卷





中の巻うらつぎ
 一旦それと違ひの
 め娘心のやせ
 うさしの膝
 も忘れぬが
 かえりつゆ
 耳めい入らば
 ちひもまや
 ちひもまや
 昔道くち後日の
 お健さへをまの
 掛りの後人見り
 て後とあはれ後
 健と後を同初

●石所の鏡著つて
 頼むくもあへ何となく
 お後永のまな何や
 名ゆへ人まきとく
 ちりうら小糸村が
 船屋へおをえ
 女中が擔
 以てむ長持一ト
 掉糸村さるの
 お船屋方お下り
 かが糸小次



一男三兄弟
 一男四兄弟
 一進別

命書
 命書
 命書

錦糸堂様

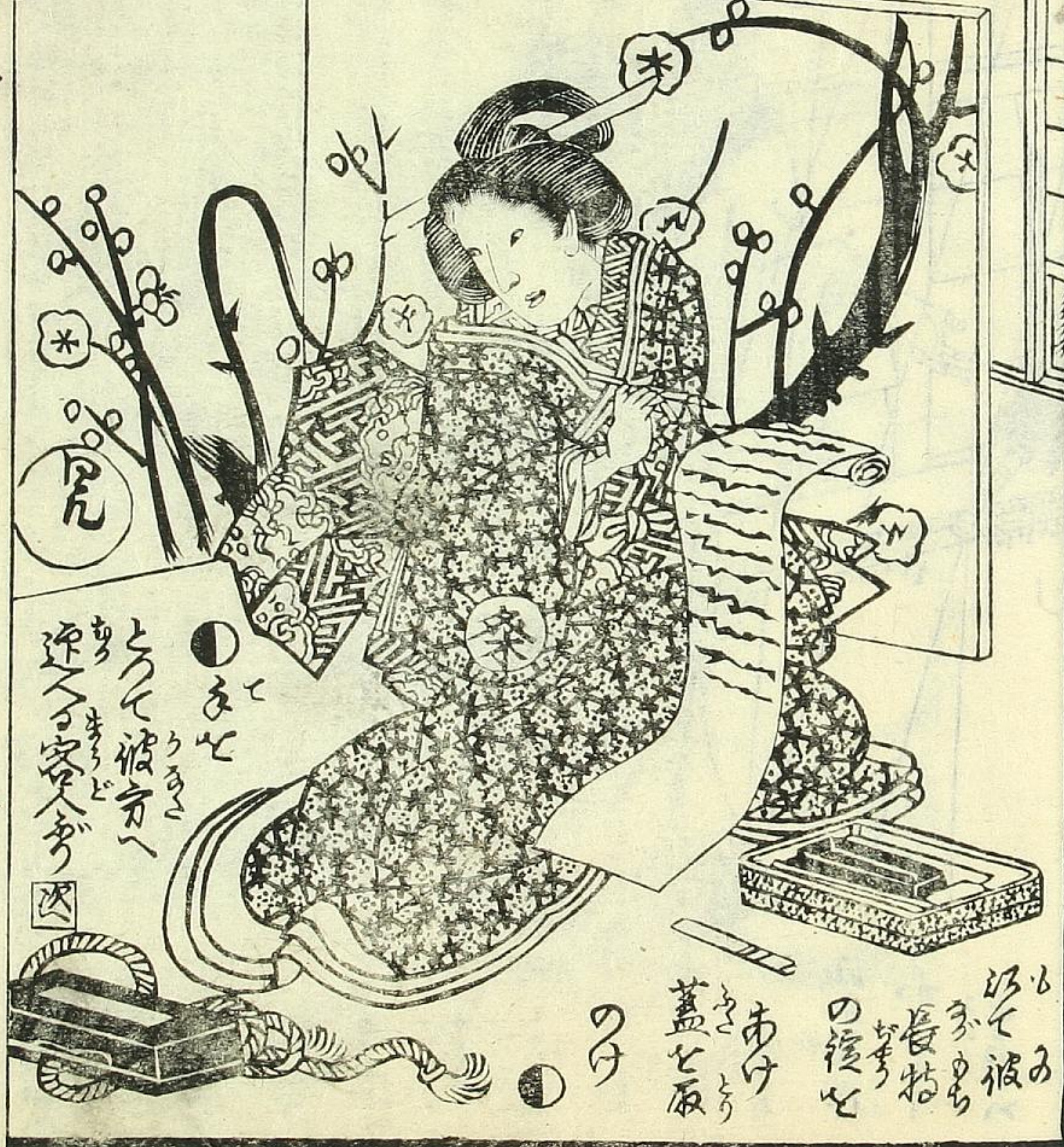


ついで
お長
お下
お長
お下

○何れも此俤ふおをい
まのよも
く

△お夜永の支那の
さよふ風様の答より
吸いご湯のぬくとも水
とる後のあひのあさは
おして終りぬりぬは
あひの日の著て了初夜告
奥の殿局くハ森結まり
いとかしまじきさつらひ
さえて傍りのあんとある
かいて侍形を条むり跡床と
ぬけてを煙を神ふ隠して次の
間ふ癒てあるおそろと個ひく
湯のみすまと密とまきり合程

お父さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう
お母さるくおねごう



お長
お下
お母
お長
お下
お母
お長
お下
お母
お長
お下
お母

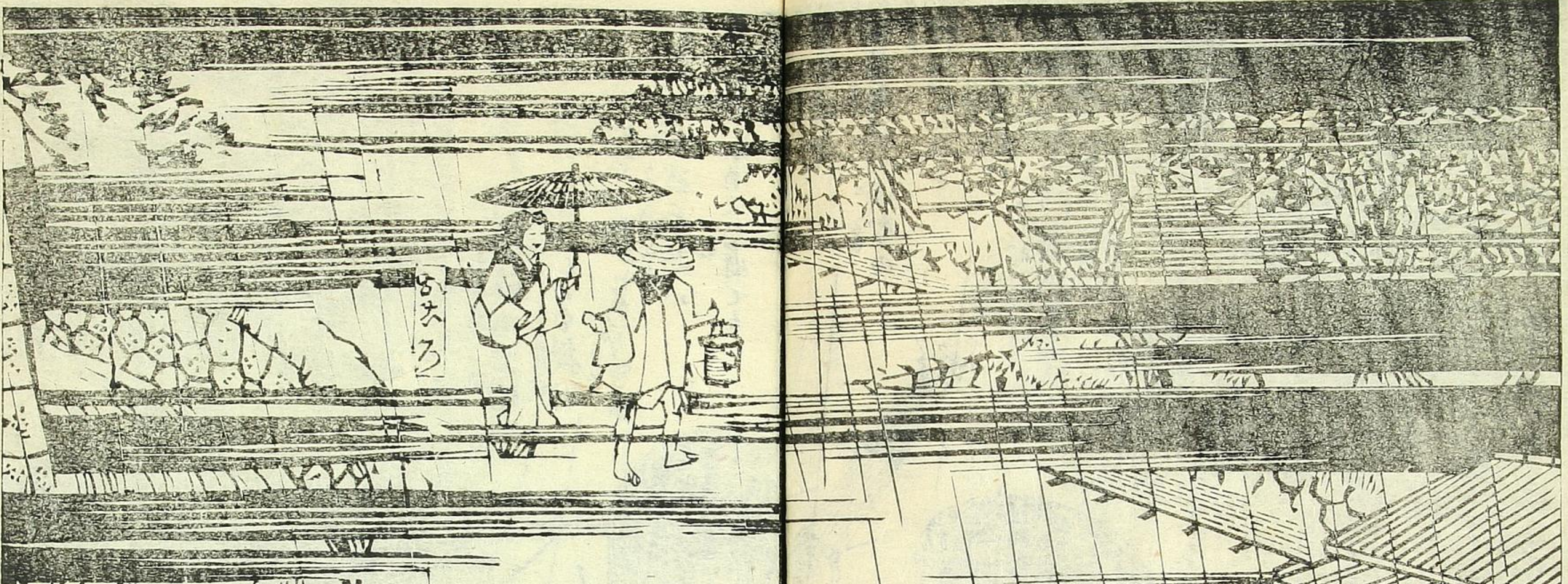
秘 密 村 入
 ま ぐ 桑 村
 男 の 膝 へ の け
 かけ だ ぞ 宿 屋 ぞ
 や げ の 頼 小 娘
 の 秘 密 村 入
 ま ぐ 桑 村 入
 ま ぐ 桑 村 入
 ま ぐ 桑 村 入



次へ
 く
 細
 月 と の
 来 者
 と 月 と の
 来 者



宿 屋
 の 宿 屋
 の 宿 屋
 の 宿 屋



それ
 父が五年以
 前控へる色
 たる中宮の
 九助が一人の
 働かざるアノ
 長持人お前を
 夜具と云ふお前を
 忍びまする以目の細く甘小
 飛立やうの跡くくお前をせしめ
 参りしお前をせしめ
 そのいせんお前をせしめ
 空以お前をせしめ

お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ

お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ
 お前をせしめ
 寺小僧のお前をせしめ

菊重四下

四

ついでにツホ飛たるうそのまきと名女儀彼と
 互ひに申渡が踊り秘考古の古明
 幼る心けつわと格かて世事由
 ありと胸小きまぬ初意は忽ち
 東く地産の産も新うまさめ
 ごと後々内内めと世のぬも
 やがて舞舞入る月の影さ
 くまき焼火の焼煮らるま
 取まらわれと世の産ふの如
 壁小耳めあふねども後
 一重のひ方めかところ胃小
 捲い込む彼長持の
 不審とありへは藤て由

●世の助自の衆ある衆むが舞舞の
 産るゆまきと名徳花まゐり女乳
 の只一ト筋小長
 あふむかひの産らるる紙
 ぞ忘
 れて
 踊りの
 舞の
 色
 舞の
 舞の
 舞の
 舞の





まの夜この夜の糸

あふかほせとら投由

まをうくと細及

たどて

来からる結登

五女との

せじ

宵の

急におはひと

安

あ

か

か

あ

あ

あ

あ

あ

あ



且那稱う俄う

のつせ

の道おる

たはせ

今夜

限り

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あ

あつと

ゆの

あ

あ

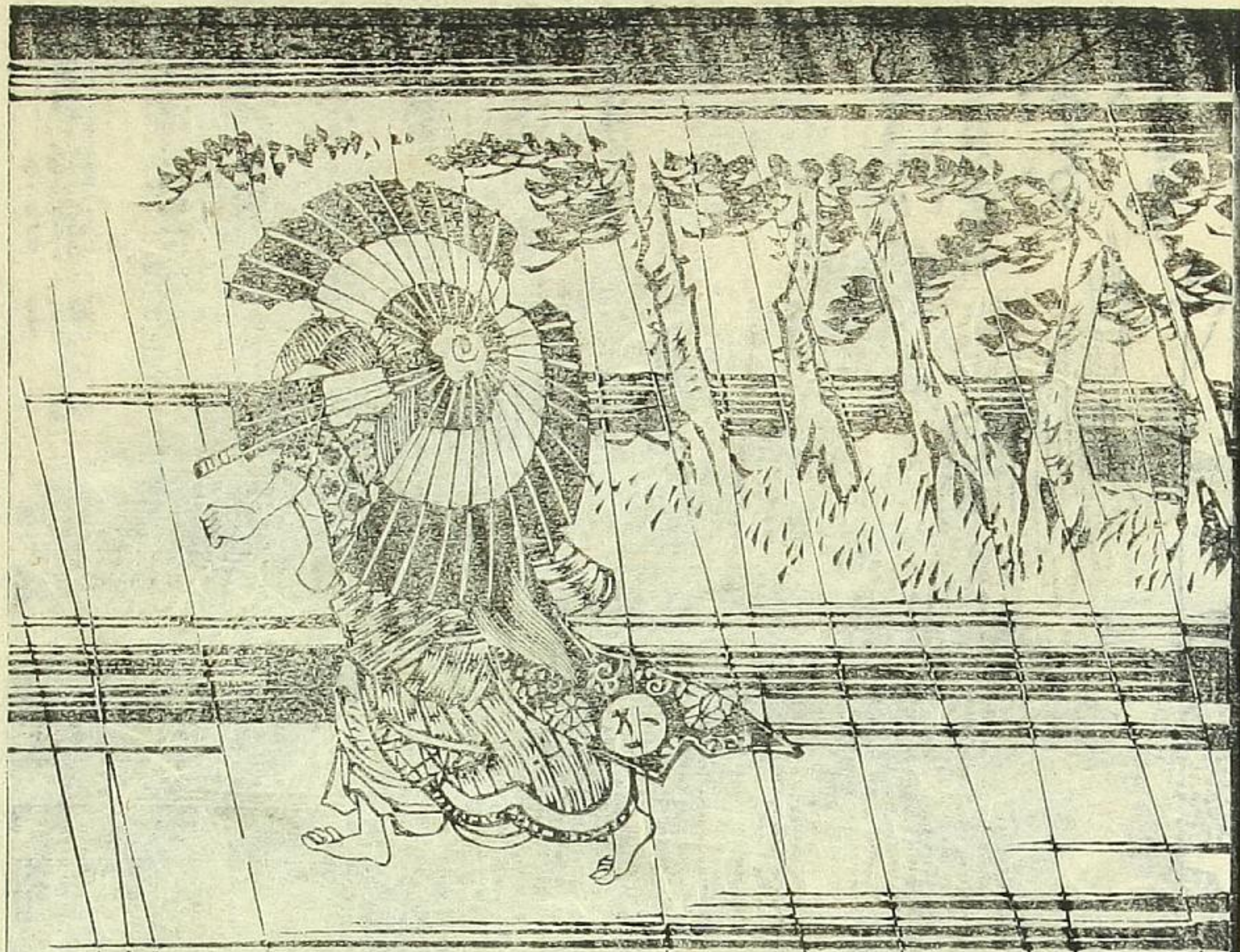
あ

あ

あ

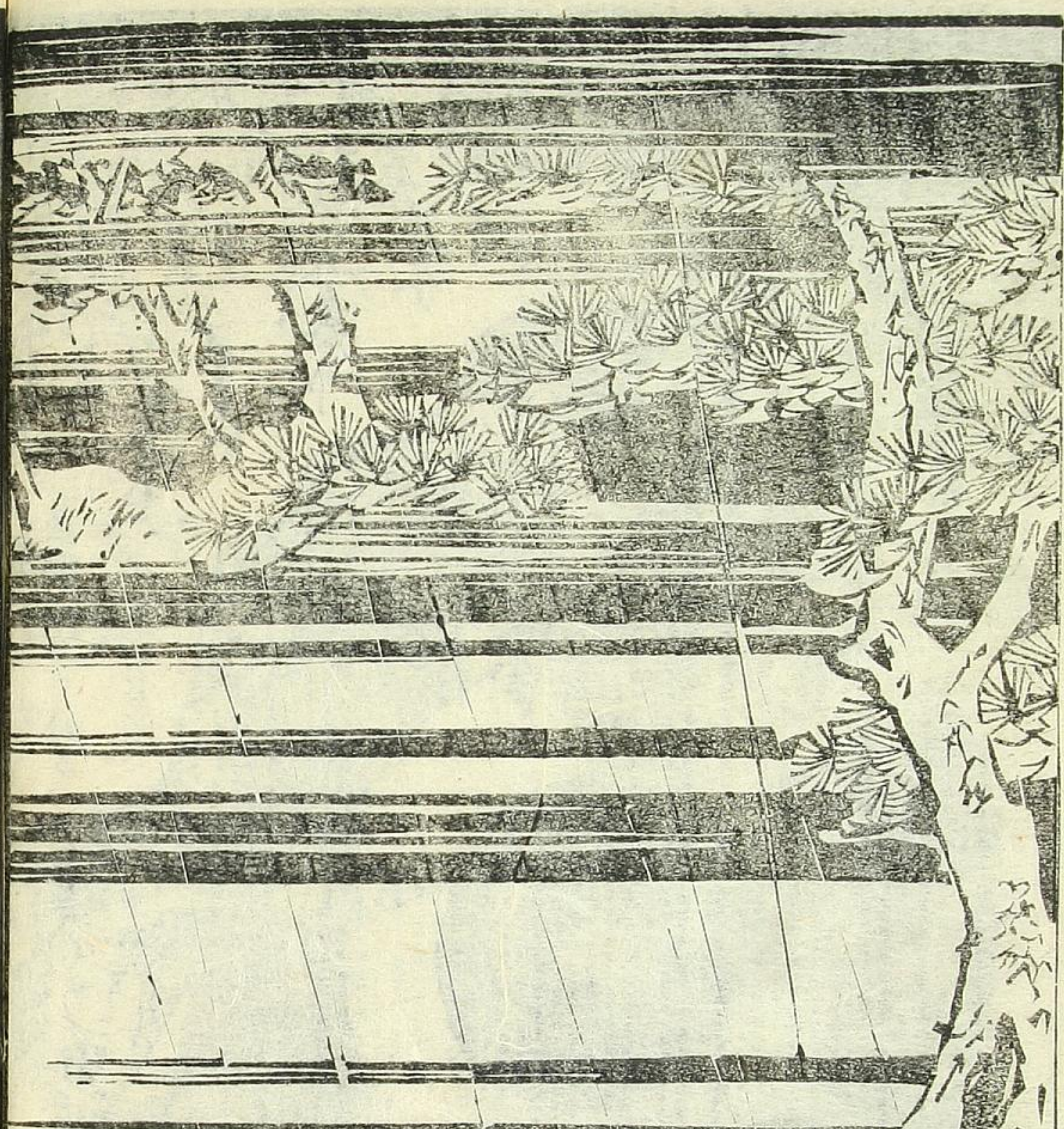
あ

あ



菊
田
小

ト世を以て合む九女の中ありと
 おもひ侍りありを以て九女ありて
 仍たあつたてのつとむるに
 小川殿とて因らるる
 まつりつもの通らぬ
 後復のときをいかに
 不審とていかに
 挑灯り又小あはれ松の
 うらうけ懐ろろり取ひてす



菊
田
小

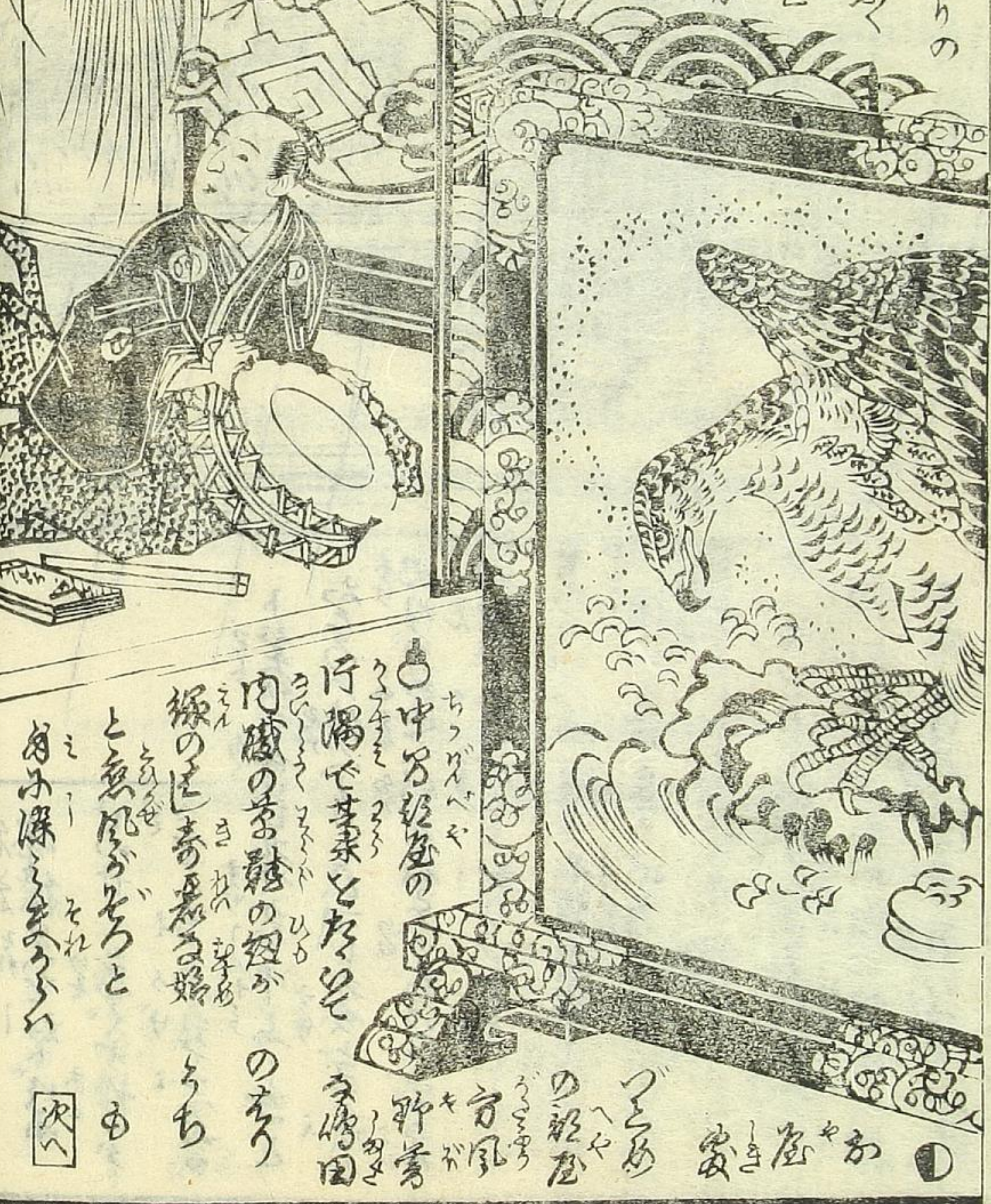
消し中間九助又
 世の世取らわりの



煙管へ灯りの
 火をとりし輪小あ
 けつ焦つとあこ
 ろの方と庭月か
 んちり何あ白
 知つね人伝
 さる人家
 教区系
 申放るの
 小里に
 松の枝を
 とさあひ
 細くあひ
 川宿して
 びせきう何
 形して
 どの用くその
 怖ういむの
 あぐく富の
 九歳が頼まれ
 仕事二箇うひ
 之款服志を
 由しね入去奉
 の二月まめか
 兄の森を湯
 水つね色



まご
 後書
 盤で来
 とさう
 ちんげんや
 中乃松屋の
 行濁で来とたど
 内蔵の若鞋の短が
 縁の区奇者さ始
 と意気がそろと
 月小深とさうら
 次へ



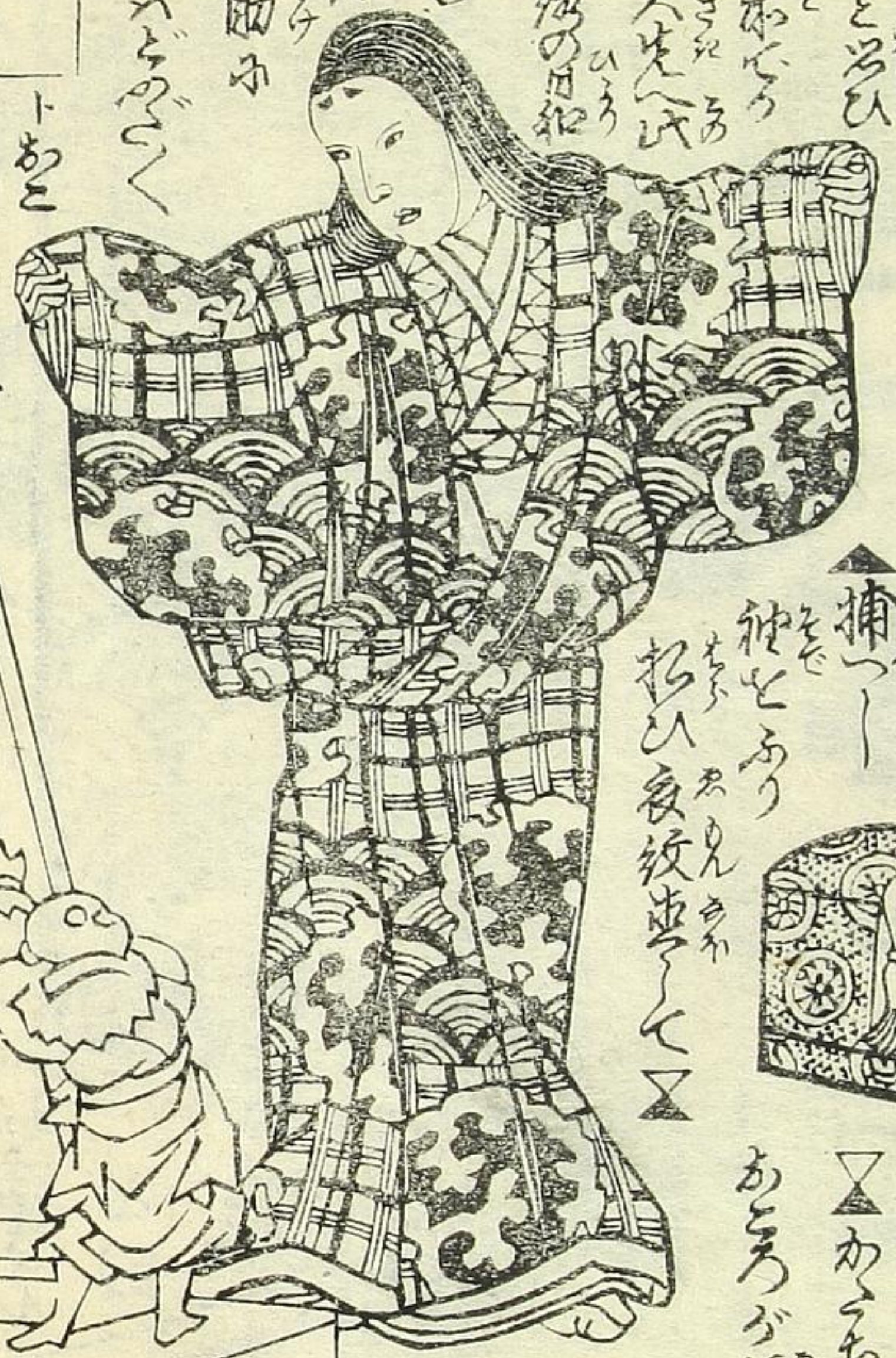
菊
 百
 日
 一

菊
 百
 日
 一

つぎまゝ下波とび
かまじりぞや何れぞ
ふとろろとあふ先
お供ひつば其意の日記
癖でまゝ隠出
とあるのあま
とあるありの九曲の
抱きて流るるをいふ

番組

茨の上 齋藤
張良 宣世



ろが合羽の袖と
とくく袖のあま
引家られぬりの
るの返はて

編者 久保田彦作
畫工 梅堂國政
版元 錦榮堂

捕り
神とあり
招ひ衣紋並くと
かまじりぞや何れぞ
その内五編
のすゝめ
小解え

東京 榮重 大圖 八色入	日本地誌 畧 輕多箱入
開明 東京 新圖 銅鑄	日本史 畧 輕多日
開明 皇國 新圖	小學 單語 輕多日
小學 教授 書 數種	和英 對譯 輕多日
錦 繪 畫 帖 卷	近世 英雄 輕多日
文人 畫 圖 扇 卷	素語 錄 數種
新 大系 繪 畫 卷 多	千代 紙 卷 多
和漢 書籍	繪本 料子 數種 多
東錦 繪 問屋	東京 第一 大區 六小區
	日本 橋通 壹丁目 十九番地
	大倉 孫兵衛

010190510587

